

*「ボレーシェ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



4年目を迎えた菜の花プロジェクト(2月訪問報告)

2月14日から現地を訪問しました。ウクライナは20年ぶりの大雪とかで、ナロジチは白一色の冬景色でした。今回の目的は、4年目を迎えた「菜の花プロジェクト」の仕上げのための、現地の方々との協議です。2008年にBDF、2009年にBGと、ハード面の整備はできたものの、それを定常的に運用し、ナタネのバイオマスを利用して、全体を循環させるのはこれからです。ナタネ種子は、これまでの栽培で約9トンあります。これをBDFにすれば、約3,000リットル、ナタネ畑の年間使用量を賅えます。4月から搾油を始め、6月にはBDFを稼働させる予定。担当者は「土壌ステーション」のアナトリーさん。BGは現在休止状態ですが、暖かくなりガスが発生し出したら、農大生達がガスの量や成分の分析を行い、原料バイオマスとの関係を調べ、同時に、排出される廃液の成分や放射能も調べ、廃棄物対策のデータとします。BGの管理責任者は、装置が設置されている農場主のカヴェツキーさん、実際の運転は、現場監督リョーニャさんが担当。彼は大いにやる気です。ナタネ栽培と分析は、今年度をもって一区切りとし、最適条件を決定します。来年度は大規模栽培に向けた準備にかかることで、農大側と合意しました。今年は、BGの放射性廃液の処理方法も決定し、年度内には装置を設置する予定。こうして、関係者と直接ひざを交えて話し合いを重ねた結果、プロジェクトの完成に向けた一歩を踏み出すことになりました。

もうひとつ、報告しなければなりません。20年間にわたって私たちの現地窓口となり、様々な苦勞をともししてきた「チェルノブイリ・ホステージ基金」代表のウラジミール・キリチャンスキーさんが、私たちの訪問直前にガンで倒れました。手術直前に病院にお見舞いに伺いましたが、私たちにとってかけがえのない人物であり、大きなショックです。幸い手術は成功しましたが、今後、長くつらい化学療法が待っています。一日も早い復帰を願うばかりです。

(河田)



〈自宅療養中のキリチャンスキーさん(右)と
ドンチェヴァさん (2010.03/04撮影)〉

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：小牧 崇

銀行 名：三菱東京UFJ銀行 名古屋営業部 (店番号150)

口座番号：普通 6949211

口座名義：特定非営利活動法人チェルノブイリ救援中部 理事長 小牧 崇

郵便振替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-836-1073 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org



雪のナロジチから(2月訪問報告 その2) (原 富男)

2月14日から24日まで、河田さんと原が代表団としてウクライナを訪問しました。菜の花プロジェクト4年目の今年は、計画を具体的に展開する年に当たり、多くの場所で話し合いを行いました。紙面の都合で、ラスキ村・ナロジチ町・農大・学校訪問について報告します。

●ラスキ村 (バイオガス発生装置)

村議会建物で、会議をしました。今年は、装置を順週に稼働させるため、①管理小屋(貨車)の内装、②加温・保温装置工事、③原料貯蔵と給水、④排水中の放射能吸着、⑤装置周辺の防護柵の設置、⑥稼働データの収集 などを行うことになりました。古い貨車の内装は4月中に行い、5月に、加温保温・原料貯蔵と給水部分の工事を、日本人スタッフと現地が協力して行うことが決まりました。その後、放射能吸着・防護柵の設置を行うこととなります。装置の管理運転は、農場マネージャーのリョーニャ氏が行うことになり、氏は装置に大いに興味を持っているようでした。数日前マイナス27℃にまで下がったナロジチ地区ラスキ村のバイオガス装置(BG)は、40cmほどの雪に埋もれていました。改めて、加温装置の重要性を認識しました。

●ナロジチ町 (搾油・バイオディーゼル燃料)

土地管理ステーションで、搾油とバイオディーゼル燃料(以下BDFと略)について話しました。まず搾油機とBDF装置を確認し、搾油機の不具合については、シリンダーの種類が「ひまわり種用」であったことが原因とわかり、安堵しました。試作で、種子100kgから30%の油が採れたとのこと。今年の搾油は4月10日からはじめ、完了後、BDFを製造する予定。種子はこれまで9t収穫し、今年は更に2t収穫の見込み。BDFは、最初ディードゥフ氏が立会い、アナトリー氏・竹内氏・農大生などで製造する。今回の大統領選の影響で行政長が変わるが、「プロジェクト」への影響はないかを聞いたところ、次の行政長はナロジチ出身で、国連・IAEAと連携した経験者が就任する見込みで、「今後のプロジェクトにとって、良い結果が予想される」との事でした。

●農大 (ディードゥフ氏との話し合い)

09年度の研究は、分析機器の不具合で結果が出ていないが、①栽培に関しては、ナロジチでは秋蒔き春蒔きの約2倍収量があり、秋蒔きが適す。②ストロンチウムは地中30~60cm、セシウムは10~15cmにある。③ナタネが吸収するのは、水溶性のセシウムとストロンチウムである。④セシウムは事故後の年月で土壌に硬く結びついており、放射能を大幅に減らすことは難しい。しかし、⑤ナタネが充分放射能を吸収していれば、裏作が可能ではないか。⑥栽培作業員の内部被曝については、春の作業前と後に測定する。⑦播種量を一般の5割増しにすると収穫が多く、酸性が高まると放射能の吸収が高まる。⑧将来、何らかの助成金を得て、エコロジー村・土壌浄化・地区の復興施設を作りたいと、意欲的でした。

●学校訪問 (ラスキ村、ナロジチ町)

菜の花プロジェクトや放射能の被害・影響を、子ども達に知らせるとともに、日本文化を紹介する写真展を、ラスキとナロジチの学校で行うことになりました。4~5月に、その頃ラスキ派遣滞在予定の原と、静岡の山根さんグループ(次ページ参照)が、日本文化を紹介できたら…と話が進みました。



お宝ネット情報

残念ながら2月は、ウクライナ訪問準備と訪問中の不在、帰国後も仕事にかかりきりになりましたので、お宝ネットは1ヶ月間お休みしました。3月に入り、仕事も生活も落ち着きはじめていたので、出品を再開しております。また、春の訪れとともに多くの方から「お宝」が送られてきており、嬉しい限りです。1日に3点程のペースですが、出品する予定です。次号では、その成果を報告できると思います。

(「お宝」の送り先は、12ページを参照してください。)

「チェルノブイリ救援・中部」の20年にわたる皆様の活動に、頭が下がります。

この度、環境カウンセラーの肩書を持つ栗田裕之さん、農業問題に取り組む三浦雅司さん、菜の花プロジェクトに関心を持つ山根の3人で、出掛けることになりました。原発事故後の様子、土壌浄化や新エネルギーの菜の花プロジェクトの視察、小児病院訪問、小学校での文化交流などをやろうと張り切っています。かつて、静岡サレジオ小学校の保護者だった私は、小学校が支援していた「チェルノブイリ救援・中部」スタディツアーに参加して11年が経ち、まさか再度訪問できるとは夢にも思わず、時が経てば忘れ去られてしまいそうなチェルノブイリに関心を持ってくれる、2人の同僚に感謝です。「救援・中部」の河田先生から、小学校で「ジャパンディ」を開催すれば文化交流もできるとお伺いして、さっそく、私が住む静岡市の街並みや産業のパンフレットを集め、駿河工芸の竹細工の紹介をしようとか準備を始めています。小学校で村の子ども達と会えるのが、今から大変楽しみです。また、日本各地で、新エネルギー開発や環境教育の一環として、「菜の花プロジェクト」が実施されていますが、それに加え、放射能の汚染地区で土壌浄化の実験が行われていることに、関心を持っていました。同僚の農業一筋の三浦さんは自然が大好き人間で、8月にはヒマラヤに登るらしい。放射能汚染地区の作物に関心を持つ栗田さんは、環境問題はもちろん、植林運動に参加したり、地域住民とエコ活動に専念中。

5月は、長野の原さんがバイオ実験のため現地に滞在中とのこと。お目にかかって、様子を伺うのを期待しています。ツアーの計画や航空券の手配などは、「救援・中部」の山盛さんにすべてお任せ。「救援・中部」のおかげで、原発事故の石棺まで行け、また地元の方とも交流できますことを、ありがたく感謝申し上げます。

<被曝した子ども達の願いに応えるために> チェルノブイリ24周年救援企画in名古屋

「このチェルノブイリの災いは静かにやってきました。すばらしい春の日、タンポポの咲きそろう緑の草原、この草原にいる子ども達のことを想像なさってください。軽やかな風が吹いています。まだ、あまり知られていなかったチェルノブイリの方から風が吹いてきました。そして子ども達は花を摘んでいます。その母親達は、タンポポからコンポートというおいしいジュースを作っています。全ての家族が満足げにそのジュースを飲んでいます…。」（「たった1回の原発事故」より）

1986年4月26日午前1時23分。旧ソ連ウクライナ共和国チェルノブイリで、その規模において比較をするものがないといわれる原発事故が起きて、24年がたとうとしています。これだけの月日を経ても、なお続く放射能の被害と犠牲。あらためて、「チェルノブイリ」とはなんであったのかを問い、「チェルノブイリの子ども達」を二度と出さないために、この「チェルノブイリの子ども達」が発する未来へのメッセージは何なのかを胸に刻み、私たちに何ができるのかを探るために、この4月に講演会と写真展を開催します。

講演は、ドキュメンタリー映画「ヒバクチャー世界の終わりに」や「六ヶ所村ラプソディー」の制作者で映像作家の鎌仲ひとみさんと、「チェルノブイリ救援・中部」理事で、国内・外の公害問題や遺伝子組み換え問題に関わってきた、分子生物・環境科学専門の河田昌東さんが行います。鎌仲さんは「ひばくの連鎖を終わらせるために私たちにできること」、河田さんは「科学者の眼で見たチェルノブイリ」というタイトルで講演します。写真展は、広河隆一さんチェルノブイリ写真展、「チェルノブイリ救援・中部」活動紹介など。なお、前回のポレーシェで、講演者は「広河隆一さん」とご紹介し、ちらしにもそのようになっていましたが、広河さんが海外へ急遽行かれるとのことで、変更いたしました。（山盛）

(詳細は、同封のちらしを参照してください。)

アート・セラピーにご支援を!!

「アート・セラピー」とは、ジトーミル州立小児病院の血液腫瘍センターで行われている治療で、病気に苦しむ子ども達に、美術の授業を通じて精神的な支えを与えることを目的とした、ウクライナでは画期的な治療方法です。ホステージ基金の会計を担当するドンチェヴァさんが、かねてより力を注いでいる支援事業です。治療を受けた子ども達は、重い病気のことを忘れ、芸術の世界に入っていくことで恐怖から解放されます。そして、自分も普通の子も達と同じだと感じられるようになり、前向きな気持ちを持つことができるようになります。

しかし、この治療を継続して行っていくためには、絵の具・筆・画用紙などの美術用具の費用に、年間60万円ほどかかるそうです。そこで読者の皆さまに、アート・セラピーの支援を呼び掛けたいのです。生まれながらにして、20年以上前の原発事故から逃れることのできない子ども達。彼らに、投薬とは違うこの治療により、心の充足を感じてもらうために、是非ともご協力をお願いいたします。（市原）

継続した支援活動の展望が開けてきました。

〈財政再建委員会より報告（神谷）〉

113号～115号で、緊急のお願い・ご報告をして以来、多くの方々のご支援、並びに「助成金申請採用通知」をいただき、新年度予算の目途が立ち、また複数年度に渡る展望も見えてきました。

以下に、3月中旬迄の状況を報告させていただきます。

①「賛助会員」の募集

- ・毎年度内に、寄付金 3,000 円以上お送りいただいた方を「賛助会員」として、翌1年間ポレーシェを送らせていただきます。
- ・2月末現在、購読者数の約45%の方に、ご協力いただきました。3月末迄の集計結果を最終確認して、5月発行のポレーシェ（117号）発送から、実行させていただきます。

②「菜の花プロジェクト・一坪キャンペーン」の募集

- ・2月末現在、53名 95口の応募をいただきました。
- ・3月末迄の応募者の県名・苗字をナロジチのナタネ春時き畑に看板表示し、現地の皆様に日本からの思いを伝えたいと思います。
- ・「一坪キャンペーン」は、来年3月まで応募をしていますので、引き続き、ご支援・ご応募をお願いします。

③「官民の助成金申請」の現状

- ・1月末までに、8団体へ申請をさせていただきました。
- ・3月中旬迄に、(財)日本国際協力システム・NPO法人アルシュ・東海地域NGO活動助成金・三井物産環境基金（3年間継続）から申請採用のご連絡をいただき、助成金総額は577万円です。その他は、申請不採用が2団体、申請辞退（採用の決定した他の助成金申請と、費目が重複するため）が1団体、採否未決定が1団体です。

④1月・2月 寄付金のご報告

- ・1月の寄付金は10,193,499円、2月の寄付金は385,017円でした。



〈州立小児病院の血液腫瘍センターにて〉

新年度の活動に向けて、皆様方の寄付金・助成金で大きく弾みをつけていただき、改めて感謝を申し上げます。今後とも、長期的な活動の継続に向けて、一層のご支援をお願いいたします。

「チェルノブイリ被災者・ゼムリヤキ(同郷人)」「ウクライナ・キエフ市)での研修

2010年2月～3月 研修終了編 【外務省長期研修プログラム】 (戸村 京子)

【被災者団体の抱える問題】

2月、研修のフィールドワークとしてジトーミル州へ出かけ、チェルノブイリが支援する三つの被災者団体への聞き取り調査や、チェルノブイリ代表団訪問(1～2ページ参照)に同行するなどしました。

被災者団体への聞き取り調査(6～7ページ参照)では、「チェルノブイリの消防士たち」、「チェルノブイリ障害者支援基金」、「リクビダートル」の団体事務所を訪問し、活動についてのお話を聞きました。それぞれの団体毎に特徴があり、事情も違い、直接訪問してその内実の一端をうかがい知ることができました。

一方、キエフ市にも同様の被災者団体があり、地区別のチェルノブイリ被災者団体のリストによると、56団体が登録され、ゼムリヤキと同じスニャンスキー地区では、9団体が活動しているようです。この中の一つ「チェルノブイリの障害者基金」には、聞き取り調査に協力してもらいました。

それぞれ共通に、会員の健康状態が悪化し、病状が重いと入院費用や医薬品高騰など医療問題が深刻で、また団体の財政状況は厳しく、スポンサー探しがたいへんだと聞きました。

【アンケート】

ゼムリヤキのスタッフに、アンケートの協力をお願いしました。チェルノブイリ原発事故直後のプリピャチ市からの強制疎開についてや、健康状態・経済状態など個人の生活の内実に関する内容もあり、無記名も可としましたが、全員が記名でプライベートな問題にも回答してくれました。これは、6ヶ月間の交流による信頼関係の成果だと思えます。

『ゼムリヤキという団体は、自分にとってどういう存在か』という問いに、「大きな家族のようなもの」「同じ惨事を経験した同郷人たち」「大変重要な意味を持つところ」「相互親交や思いやりの場」「援助と出会いの場」「精神的な支え」「自分の人生で重要な意味を持つ活動」などの回答から、その存在意義の大きさを知ることができました。

【『国際婦人デー』の祝日と『お別れ会』】

3月8日は祝日『国際婦人デー』で、毎年お祝いのイベントが行われるのですが、私の帰国日と重なるので、今年は5日に前倒して開催されました。イベント担当スタッフのハリーナさんを中心に、出し物を企画し、スタッフ皆で食べものを準備し、参加会員もそれぞれに自慢の料理を持参してきました。この日は、女性ばかりではなく男性会員も多く出席して、アコーディオンも入り、詩や歌、ダンスと盛り上がりました。私は、この会の始まりに『ゼムリヤキ名誉会員証』を授かりました。

翌日、教会のオルガンコンサートに皆と行くことにな



<代表タマーラさんから『ゼムリヤキ名誉会員証』をいただく>



<『国際婦人デー』のお祝いの会>

っていて、「16時に事務所へ来てね」と言われ、「早いんじゃないの?」と思いながら事務所のドアを開けたところ、スタッフ全員が出迎えてくれ、サプライズの『お別れ会』が用意されていました。「さよなら」ではなく「じゃ、またね」という言葉でお礼を言いました。数日前のプラスの気温が、またマイナスに戻り、キラキラとダイヤモンドダストの舞うコンサートの夕べでした。

研修を終え、ゼムリヤキでの研修成果をどのように生かすことができるか、これから考えていきたいと思っています。

特集!!

被災者3団体へのアンケート・聞き取り調査 実施報告

(戸村京子)

今回の、「チェルノブイリの消防士たち」基金・「チェルノブイリの障害者基金ジトーミル支部」・「リクビダートル（事故処理作業者）」の被災者3団体に対するアンケート・聞き取り調査の目的は、ジトーミル州の民間『健康保険組合（リカルニア・カッサ）』加入・利用の実態と、チェル救の医薬品支援とが効果的に機能しているかどうかを知ることです。被災者3団体への医療支援については、数年前より、当3団体やカウンターパート「チェルノブイリ・ホステージ基金」との間で議論を交わしてきました。チェル救としては、同『保険組合』加入を勧めて“チェル救の医薬品支援との2本立て”の形で、支援金をより有効に活かしたいと考え、07年にもアンケート調査を行いました。始まって間もない『保険組合』に対し、不安感を抱く各団体は積極的賛成ではなかったものの、チェル救の期待感や意向も入り混じり、“チェル救の支援との2本立て”で受け入れられました。

それから3年が経過し、その実態は現在どうなっているのかを知り、その結果から今後の方向性を考えるための評価として、3団体とその個人会員へのアンケート調査、さらに団体への聞き取り調査を行ったわけです。次年度予算についての話し合いも行う2月の代表団訪問までに、大方の調査結果を得ておきたいと、アンケートは昨年12月末から1月に掛けて、現地で配布・回収が行われました。それを受けて、2月上旬にジトーミル市へ行き、各団体事務所を訪問し、聞き取り調査にご協力していただきました。



<「消防士基金」事務所 代表チュマクさん(左)と、消防局副局长(チェルノブイリ担当)>



<「障害者基金」事務所 代表ヤリノフスキーさん(右から2人目)他運営委員>

その結果、次のことがわかってきました。

『健康保険組合』の保険は、「複数の病気があっても1つの病気にしか適用されない」「入院期間の12日以内にしか適用されない」「州内の病院でしか適用されない」「会員の病気は重篤な場合が多いが、必要な高価な医薬品には適用されない」「効果的な治療は得られない」…など。それゆえ、どの団体でも、会員の被災者にとって『健康保険組合』の利用は効果的ではないと否定的に考えられていました。かつては、会員の加入を勧めていたが、現在は積極的には勧めておらず、会員の意思に任せているとのことです。

その一方で、チェル救の医薬品支援は『保険組合』では適用されない医薬品のために使われるため、団体・会員に大変ありがたがられています。支援金額の違いはありますが、「消防士たち基金」では70名(会員数202名)、「障害者基金」では70名(同96名)、「リクビダートル」では延べ142名(同131名)に利用されています。

これらの調査結果とアンケート結果(一部翻訳が未終了)を考慮して、これから今後の支援の在り方を見直すかどうかを議論していくことになります。



<「リクビダートル」基金 代表コバルチュクさん>

「チェルノブイリの消防士たち」基金での聞き取り

非常事態省ジトーミル州支局内にある事務所は、室温 15 度。肌寒さを感じながら、活動状況についてのお話を聞きました（現在は陽の当たる部屋に移転）。05 年の調査以降 4 人が亡くなり、8 割の人が 50 歳までに亡くなっているとのこと。会費として給料・年金の 1%を徴収しますが、チェル救からの支援金は振り込み後 2 ヶ月間でなくなってしまっているので、スポンサーを探して寄付金を募っています。

口座に支援金がなくなると、消防局職員に要請してカンパを集め、それによって治療を受けられた会員が、元気に退院できたとのこと。当時事故処理に当たった人たちが 40~60 歳になり、病気がたくさんあって覚えきれないほどだといいます。

「州支局医療センターがチェル救他の支援によってでき、順番を待たなくても検査や治療が受けられるようになった。今後はナロジチ等への移動検診で、予防医療に取り組んでいきたい」とのことでした。



<消防局内の事故の展示>

「チェルノブイリの障害者基金ジトーミル支部」での聞き取り

事務所は古い建物内の細長い一室で、机と棚があるのみで、電話もなく、連絡には個人の携帯電話が使われている状態です。活動は、年に 2~3 回教会からの人道支援物資（中古衣料品）を配分したり、市から配分される食品セットを配ったり、入院の世話など会員のサポートなどを行っているそうです。

会員の抱える健康問題は、心臓・血管系疾患や、腫瘍・肝硬変など。会員の健康問題が最も大事なことであり、医薬品の高騰のため、スポンサーを探す努力をしているとのこと。しかし、団体の運営上の援助資金が問題で、社会に支援を呼びかけても理解が得られず、行政に訴えても理解してもらえないということでした。



<「障害者基金」事務所>

「リクビダートル」基金での聞き取り

市の中心部にある事務所は、市の社会福祉基金の事務所でもあり、部屋一杯に支援物資が積まれていて、仕分け作業が行われていました。チェル救の支援以外にも、国の支援はないので人づてで資金を集め、州や市にも陳情・働きかけをしているそうです。

州内のチェルノブイリ基金 8 団体をコーディネートし、連携して被災者のリハビリセンター設立を呼びかけているといい、エネルギーな活動ぶりが伝わってきました。運営委員にはそれぞれに課題が課され、3 ヶ月ごとに報告することになっているようです。



<「リクビダートル」基金事務所
運営委員と竹内さん>

キリチャンスキー氏の

「障害者支援活動」に対する意見(抜粋)

まず、チェルノブイリは永遠に、少なくともあと五世代は続きます。一方、国は政争に明け暮れ、被災者を始め人々の問題はなおざりにされています。チェルノブイリに関する国のプログラムは、どれ一つとして実現されていません。ウクライナでは、政治的な理由でチェルノブイリ原発が閉鎖されましたが、それに対して西側諸国は何の見返りも与えず、新しい石棺はできておらず、再度の爆発の脅威は未だに残っています。ロヴノ原発とフメリニツキー原発の新規の原子炉は、ウクライナが自力で完成させました。もちろん支援は行われており、日本からの支援は市民団体のみならず政府レベルのものもあります。ありがとうございます！ そのようなサポートがなければ、状況は今以上に悪くなっていたことでしょう。

4月には、また事故の記念日が巡ってきて、被災者への配慮について語られるでしょうが、それも一時のことです。2年前、大統領が「事故処理作業者の日」を作りましたが、彼の配慮といえはそれだけです。もちろん、この日には催しがあり、何かを与えられ、しかし翌日から次の4月26日までは、またすべてが忘れ去られるのです。

皆さんは3つの基金を支援されています。その中で、最もしっかりしているのは「**チェルノブイリの消防士たち**」基金です。主な理由は2つです。まず、国の組織の中でも(軍隊・警察・医療など)、消防士たちは最もよく組織されています。消防関係者たちは、何か私腹を肥やそうとかいう考えではなく、まともな考えに基づいて仕事をしています。もう一つの要因は、ボリス・アンドレイヴィチ・チュマク氏です。彼は州内では絶大な権威であり、現在勤務しているすべての消防士たちに尊敬されています。皆さんの支援は、同基金の予算の約4分の1を占めています。基金の行っている支援は、医薬品・保養券・食品・配慮・暖かい言葉などで、支援を求めて拒否された人は誰もいません。皆さんの支援のおかげで、高価な医薬品の援助を行うことができます。同基金のおかげで、非常事態省州支局・医療センターの設備が整えられています(皆さんと「草の根」の支援で)。

「**リクヴィダートル**」基金は、今日、代表アレクサンドル・コヴァルチュク氏のおかげで威信を得



<クリスマスカード配布のため、小学校を訪問
(2010.1月)>

ています。彼は精力的かつ事務的ですが、それほど効果的に活動しているとはいえません。会員には雑多な人たちがおり、支援を受けることのみ求めるメンタリティの人がいること、個々の人が自助努力をするのではなく、代表をあてにし、外国の支援(宗教団体提供の中古衣料や食品)をあてにしているのです。しかし、基金はポジティブな役割を果たしており、事故処理作業員たちに配慮し、彼らを団結させています。皆さんの支援は、基金のメンバーにとって大きな意味を持ち、運営委員会が、提出された処方箋に基づいて、誰に何を提供するかを決めています。薬の購入と受け取りは「メディサン」社で行われ、同社はすべての事故処理作業員に対し、親身に対応しています。

「**チェルノブイリ障害者基金**州支部」は、主に皆さんの支援で存続しています。彼らも食品の支援は時折受けていますが、この団体ではまた分裂があり、何をあてにし、何のためにそんなことをしたのか、私にはわかりません。

民間保険組合については、多くの欠陥があるにもかかわらず、有益な点もあります。少なくとも、会員が無料で検査を受けられます。年間の会費は、障害者にとってはまとまった金額240グリヴナ(約3,000円/年)。毎月20グリヴナを支払うことに、すべての障害者が同意できるわけではありません。また、組合のサービスに憤慨させられた人もあるかもしれません。というわけで、組合に対する意見は実にさまざまです。

支援は、もし可能性があるのなら、続けられるべきです。「私たちの国で、状況がよくなるのが全く期待できない」ということだけでも、その理由になるでしょう。(原文ロシア語、竹内訳)

 土壌浄化とエネルギー生産の国家プロジェクト

最新のニュースである。ベラルーシは、チェルノブイリ事故の放射能が最も多く降り注いだ国で、被災者も多く、日本のチェルノブイリ救援団体の多くはベラルーシの被災者救援にかかわってきた。そのベラルーシで、ウクライナにおける私達の「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」と殆ど同じ発想の巨大プロジェクトが、今年から始まることが分かった。汚染地域で様々な植物を栽培し、そのバイオマスからバイオエタノールを生産し、同時に土壌浄化を目指す…という「チェルノブイリ・バイオクリーン・プログラム」である。その最新情報を伝える。これに比べれば、我々の計画はプラモデルのようなものだが、規模の大小はともかく、成功を祈りたい。

●アイルランドのバイオベンチャーが提案

この構想をベラルーシ政府に提案したのは、アイルランドのGreenfield社である。社主のアンネ・マックリーン女史は、アメリカ国籍のアイルランド人、永年国連で仕事をしてきた中で、エコロジーやチェルノブイリに関心を持ったらしい。彼女は当初、食料生産と競合しない放射能汚染地域で甜菜（てんさい/砂糖大根）などを栽培し、それを発酵させてバイオエタノールを生産すれば、アルコールの蒸留過程で放射能が除去できるのでガソリンに混ぜて利用でき、同時に土壌浄化が可能、と考えたのである。この構想が生まれたのは、我々がナロジチでのナタネ栽培を考えたのと殆ど同じ2005～6年頃らしい。彼女は、叔父でドイツの大手ビール会社（ハイネッケン）前社長に話を打ちかけ、資金を得てベラルーシで「フィージビリティ（適合性）調査」を行い、実現可能との結論を得た。そしてGreenfield社を設立し、本格的な活動を始めた。

●第2世代バイオエタノールとは

その後、彼女はドイツやイギリスの様々な専門家との協議を経て、バイオエタノール原料を、糖分を含む作物ではなく、あらゆる植物や木材に含まれる「セルロース」を原料とする「第2世代バイオエタノール」生産に決めた。全てのセルロースは糖の重合体である。それを分解すればブドウ糖が大量に得られるので、それを発酵原料にする、というアイデアである。これは、現在世界中で開発中の最新技術で、日本国内では環境省が、廃家屋の木材からバイオエタノール生産の実証実験をしている。このように第2世代バイオエタノール

は、原料に制限がないため次世代のバイオエネルギーといわれ、世界中で開発競争が盛んである。この分野でも日本は立ち遅れている。我々が作るBDFは、軽油と混ぜてディーゼル燃料として使うが、エタノールはガソリンと混ぜて使うことができる。ブラジルは現在、サトウキビを原料とする世界最大の第1世代バイオエタノール生産国である。ブラジルでは、車はもちろんのこと、エタノールで飛ぶ飛行機まで開発されている。ベラルーシ政府は、ブラジルと競合できる産業にしている。

●ベラルーシの計画

Greenfield社は数年かけて、ベラルーシ政府や、EU各国の企業や銀行、専門家と協議を重ね契約を結んできた。そのプロジェクトが、いよいよ2010年から始まる。まず、ベラルーシ国内の2箇所（モジュールとボブルイスク）にバイオエタノール工場をつくり、年間67万m³の生産を目指す（モジュールは、ナロジチから車で3時間ほどの汚染地域）。実現すれば、ヨーロッパ最大のバイオエタノール工場になる。生産したエタノールはEU諸国に輸出し、外貨を得るので、ベラルーシ政府は国営企業「Belbiopharm」を設立した。当面、「GF社が1億ユーロ、ベラルーシ政府が2千万ユーロ拠出して工場を建設する」という。我々にとっては、夢のようなスケールである。肝心の放射能は、エタノール蒸留後の残渣を燃焼して発電し、その焼却灰に残るので、それを永久保管する。バイオマスの栽培面積は48,000km²。土壌浄化には30～60年かかる、と試算している。
(河田)

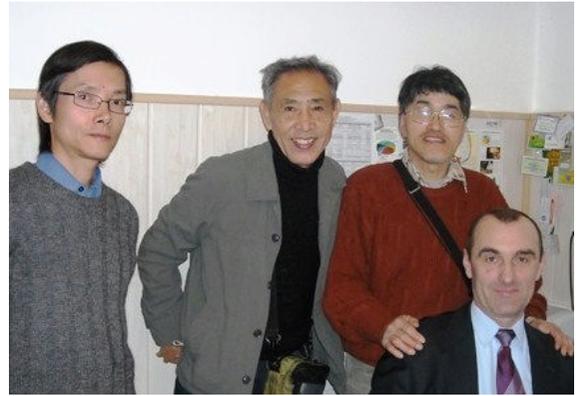
竹内さんのウクライナ便り

雪の多く寒かった長い冬がやっと終わり、キエフでも樹々の芽が膨らんできました。新大統領の下で、最高会議でも新しい連立内閣が形成され、ヤヌコーヴィチ大統領の盟友である地域党のアザロフ氏が首相となり、大統領選の第一次選挙で3位となったティギブコ氏が経済改革担当副首相に就任。過去の政治経歴中何かと汚点を指摘されている人も多く入閣しているのですが、細かいコメントは省きます。とにかく、国民が近い将来の国家運営を託した大統領の下、庶民にとってプラスとなる改革が行われていくことを期待したいところですが、楽観は許されないのが実情でしょう。

昨年末、作品が欧米でも翻訳されている著名な作家オクサーナ・ザブジコ(1960年生まれ)の新作、『捨て去られた秘密の博物館』が出版され、830ページの大冊にもかかわらず初版は即売り切れたそうで、私は第2版を2月に入ってから買いました。第2次大戦中(そして戦後もソ連軍と)西ウクライナでナチス軍・ソ連軍の両者を敵に回し戦い、現在でもその是非が議論的であるウクライナ叛乱軍を扱ったものです。ザブジコ氏は、ネット上のメディアでもしばしば政治・社会に関する発言を行っており、今回の大統領選決選投票では「誰にも投票しない」(という選択肢が投票用紙にある)を選ぶ、とあらかじめ表明していましたが、3月22日付のインタビュー(ニュースサイト『ウクライナの真実』)で、新作を語りつつウクライナ社会の現状をも分析しています。

「重要なのは、私たちに何でもしてくれる『いいツアーリ[皇帝]』を選ぶことであって、彼がやってくれないのなら、やると約束する別の『いい人』を選べばいい——というのは、ソ連時代の発想法の大衆レヴェルでの復活ですね。政治的成熟と民主主義への道のりの長さを左右するのは、社会の教育水準ですが、それが私たちの問題なのです。」

「私の知っている30歳以下の人はみな、『現在の政治家・官僚の]汚職が始まったのは、そもそもクチマ[大統領]の時代じゃない。90年代



〈ディードウフさん(右)を交えて話し合いをしました。〉

に権力の座についたクチマの世代は、ブレジネフ時代の腐敗した環境で育ち、他の行政モデルというものを一切知らなかった』と聞いて驚いています。私たちが教育を受け育ってきたソ連最後の数十年間について、ウクライナでは誰も真剣に研究していません。70年代や80年代のKGB文書が廃棄されてしまったいきさつさえ知らない人がほとんどです。」

「ウクライナ社会は、反動的な慢性健忘症の社会です。その健忘症が何十年も続いた後で、情報の蔓延する現代、社会の記憶が危険ほどに短期的なものになっているわけです。今、目の前でTVに映っているものだけを受け止め、その前に映っていたものはもう覚えていない。[中略]この状態を改善するには、教育や文化に頼るしかありません。時と時の関連、継続性を回復させていく、長く困難な過程です。私の小説で、TVジャーナリストのヒロインが行っていくように。他の手段は存在しません。」

「90年代、ウクライナでは40人近くのジャーナリストが殺されていますが、彼らは具体的な事件を追っていたわけで、それらの事件は彼らの死後追求されないままです。」

等々、興味深い発言がいろいろとありますが、ウクライナでも出版不況は深刻であり、著名作家の、フィクションとしては7年ぶりの新刊にもかかわらず、初版は1,500部だった由。ユシェンコ元大統領夫妻が後援している基金の助成があり、第2版の2万部が出、うち6,000部がすでに売れて、出版社では「第2のハリヤー・ポッターだ!」と狂喜している…というのは、ザブジコ氏のジョークかも?(3月26日)

☆クリスマスカードキャンペーン最終報告☆

クリスマスカードキャンペーン担当の、研修生小島です。皆様のご協力のおかげで、カードを無事ウクライナへ届けることができました。また、現地の子ども達も、遠く日本からの心のこもったカードに大変喜んでおり、クリスマスカードキャンペーンは大成功となりました。ご協力してくれた方、ありがとうございました。そうそう、カード配布先のひとつジトーミルの病院では、カードとともに同封した折り紙をマネて、子ども達自らも作ってみたいというようです。ウクライナの子ども達が作った折り紙って、どんな感じなのでしょう？ きっと暖かくて、気持ちがほっこりする折り紙でしょう。機会があれば見てみたいですね。さて、今年もクリスマスカードキャンペーンを行う予定ですので、お忙しいとは思いますが、もしよろしければご協力お願いします。

去年は、様々な事情でカード書けなかったという方も、お気軽にご参加ください。

(小島)



〈2010.3/14「Nたま卒業式」にて
(2列目右から3人目が小島さん)〉

2010年 2月分 励ましの言葉

- ・長い長い地道な活動 わずかですが、送金します。(石川県Sさん)
- ・いつも応援しています。プロジェクトの成果、楽しみにしています。(名古屋市Mさん)
- ・地震・台風だけでなく、原発災害も日本人としては他人事ではないと思います。ささやかな金額ですが、活動の一助にしてください。応援しています。(常滑市Sさん)
- ・チェルノブイリ救援が、今後も続けられますように！！ (沖縄県Tさん)
- ・バーゲンで買った服代、正札で買ったことにして、差額を一坪キャンペーンにあてます(笑)。(名古屋市Kさん)
- ・ポーシェ、とても読みやすくなりました。ブルーベリーの話も、とてもこわく感じました。(長野市Yさん)
- ・1円金貨、5円金貨が集まりました。菜の花プロジェクトに期待。(岐阜市Nさん)
- ・これからも活動よろしくお願いします。青森県も、再処理工場とか、Mox 大間工場とか、東通村原発とか、むつの貯蔵施設とかできて、とっても心配です。(匿名)
- ・TVなどのメディアで、原発の良さのプロパガンダに残念。電気のない生活は考えられないなさげなさ。でも、何らかの行動が生きて来る。(草加市Nさん)

3月分 励ましの言葉

- ・今年、いよいよ発足20周年を迎えられますね。いつも『ポーシェ』を拝読していて、正しく”継続は力”なのだと感銘をうけております。困難は多いと存じますが、どうか今後ともご継続くださいませ。(関市Kさん)
- ・1つの事に気づくと、自分とつながっていることを知り、あっちにもこっちにもカンパシなくちゃあ…となり、結局、大口カンパができなくなってしまいます。まだ、何にも出会えない人たちが気づいてどんどん増えていけば、お互いに楽になり幸せになるだろうなと思います。(伊那市Sさん)
- ・菜の花プロジェクト大変そうですね。会費が減って大丈夫ですか？(豊明市Tさん)

事務局便り

開花したと思えば、もう満開。これでも春?と思える寒さの中、桜は咲き誇っている。

春といえば、出会いや別れがつきものだ。研修生の小島さんが、6ヶ月の研修を終え、「卒業式」を迎えた。名古屋NGOセンター主催の研修生卒業式で、小島さんは、「何を話すか何も考えてないっす」といいながら、その言葉に反して、力強く、研修を終えた自分を語った。「自分は、物事に対してテキトーにやってきた気がする。チェル救で担ったカードキャンペーンも、始めはテキトーにやればなんとかなると思っていた。しかし、やっていくうちに、一枚一枚カードに気持ちをこめて作ってくれた人に対して、これでは失礼だと感じるようになり、真剣に取り組むようになっていった。自分は中学生の時、腰を痛め、50歳になったら車椅子になる…と言われ、その時から、物事に真剣に取り組むことを辞めたような気がする。でも今回、真剣に取り組むことができてよかった。26年間生きてきたが、人生をなめていたような気がする。」…一枚のカードはチェルノブイリの子供達の心を暖め、日本の青年の心を揺さぶる。小島さん、いやいやお互い、これからも、たくさんの「真剣」に出会えるようになれればいいですね。(山盛)

お宝ネット情報

1. 「お宝」の送り先は右の通りです。
大量の物品・大型物品などで、発送が困難な物の場合は電話ください。場合によりトラックなどで集荷します。
2. 送料は基本的に元払い（発送者負担）でお願いします。宅配便サイズを超えるサイズの物品は、各運送会社の普通便が格安ですので、利用をお勧めします。

【送り先】

〒399-4511

長野県 上伊那郡 南箕輪村 南原9955-2

原方「救援・中部 お宝ネット」宛

電話 0265-73-9355

ファクシミリ 0265-73-9352

編集後記

- ☆黄砂で視界が2mという休日に、突如「姫路城」に向かった。見た目にも素晴らしく美しいお城でしたが、辛抱強く並び、飲まず食わずで4時間半…。長い歴史を耐え抜いた遺産を拝観するには、「忍耐が必要じゃ。生温い現代人にはそれくらいの試練を与えねば…」というご先祖さまの暖か〜い配慮かも…。(美)
- ☆エアコンが壊れたので買い換えたら、エコポイントの対象だった。自分には関係ないと思っていたのでラッキー☆ いそいそと申請。日々無欲で生きていたら、たまにはいいこともあるなあ。(佳)
- ☆ウクライナ研修の半年は、あつという間。報告・まとめは一応一段落。しばしゆっくり日本の便利さ・快適さに浸りたい。だけどポレーシェ原稿、写真編集、家・庭の手入れ、あそこへ挨拶、あの人にも会って、それとお花見で親孝行、孫の世話…やっぱり半年間の留守の後始末に、帰宅後も忙しい。(K)
- ☆今、インターネットの政治・社会問題に関するブログの世界が、すごいことになっている。マスメディアが報道しない「真実」であふれているのだ。たとえば、「東京地検」で検索すると100万件ヒットする。しかし、「東京痴犬」のそれは、200万件以上である。「郵政民営化」ではなく「郵政米英化」、「マスコミ」ではなく「マスゴミ」で検索することもお勧めだ。「真実」を知り、それを伝えようとする人達は、周りから「頭がおかしくなったのか?」と言われるかもしれない。しかし、彼等は知っている。「知ろうとしなかった時こそ、頭がおかしかったのだ!」と。(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473